

犬畜生さながら

『若き日の芸術犬の肖像』から)

A Translation of "Just Like Little Dogs" from Dylan Thomas's *Portrait of the Artist as a Young Dog*

坂本正雄 訳

translated by Sakamoto Masao

2006年10月6日受理

風をよけようと、鉄道のガード下にひとりで立っていた。目の前には何マイルも砂浜があった。黄昏時のなかにずうっと汚く続いていた。波打ち際に少年が二、三人。一組二組のカップルがレインコートや風船のようにふくらませ、急ぎ足に歩いていた。そのときふたりの若者がぼくのところに来た。ふっと現れたようだった。たばこのマッチが光り、その顔を照らした。頭には明るいチェックの帽子をかぶっていた。

ひとりには愛想のよい顔をしていた。眉毛はこめかみに向かっておかしな具合に曲がっていた。目は優しく、茶色で、深く、素直だった。口元はふっくらとして、弱々しかった。もうひとりにはボクサーの鼻で、赤くて強いひげを生やし、ごついあごだった。

油を流したような海からさっきの男の子たちが戻ってくるのをぼくたちは見ていた。叫び声を上げていた。ガード下にこだまが響いた。子供たちの声はそれから消えていった。カップルはまもなく見えなくなった。恋人たちは砂山の間に消え、寝そべっていた。夏の間口を開けたブリキ缶、ビンも気にとめず、紙がふたりの周りを飛んでいた。気にとめなくてはいけぬ者はいなかった。男たちは壁にもたれていた。手をポケットにつっこみ、たばこが光っていた。誰もいない砂丘がだんだんと暗くなるのを、たぶんじっと見ているのだろう。でも二人は眼をつぶっていたのかもしれない。機関車が上を通り過ぎていった。鉄橋が揺れた。岸辺を走り去る列車の後ろに煙が雲のように流れていた。まるで穴蔵のように黒い鳥たちの大きな群れ、そのぼろ布のような翼と抜け殻の身体のような。煙はそれからちりぢりになった。篩から落ちるよう^{ふるい}に燃えさしが光った。火花が闇に消えながら砂の上に落ちていった。前の晩、小さなかかしたちが線路脇で腰を曲げ、きびきびとものを拾っていた。その縁を、くず屋の頭^{かしら}がひとり、しわしわの石炭袋と、公園管理人がよく持っている先端に金具をつけた棒を持ち、五キロほどを歩き回ったのだ。そいつらは今、袋の中に身体をつっこんで、火事のことでも考えながら、待避線の石炭輸送車で寝ていた。頭はゴミの中、ひげはわらまみれ。あるいはフィッシュガード小路の飲み屋近くジャック・スティッフ製の石板に載せてある収穫物の向こうで横に

なっていた。小路にはメチルを飲む男たちが踊り狂い、警官の腕に抱かれたり、水たまりに浮かんだ洗濯物の固まりのような女どもは入り口やびしょ濡れの壁に空いた穴に立って、吸血鬼やかまたきを待っているのだ。今ではもうちゃんとした夜になっていた。風が変わった。細かい雨が降りはじめた。砂浜自体は見えなくなった。ぼくたちはガード下のえぐり取ったような穴に立っていた。風が強かった。遠くの街からくぐもって聞こえてくる騒音に耳を傾けていた。貨車が転轍する音、波止場のサイレン、その向こうの通りを走る電車のざわざわ、犬のひと鳴き、どこからかわからない音、鉄が打ち付けられる音、遠くで材木がきしむ音、ドアがぱたんと閉まる音、家のない方向から聞こえてきた。丘の上であえぐ羊のように咳き込む蒸気機関の音。

ふたりの若者はたばこを吸う彫像だった。帽子をきつくかぶり、シャツを着ていない見張り、立会人、蒸気室の石から彫りだされた像だった。ふたりはその蒸気室のぼくのそばに立っていた。どこに行く当てもなく、何をすることもなく。雨がずっと降っていた。冬が間近だった。夜が目の前に広がっていた。ぼくはマッチを手でおおい、劇的な陰をつけた顔を見せるようにした。目が、たぶんぞっとするくらい白い顔の中に、わけありげにくぼむのだ。マッチがぱっと輝いて、気むずかしい、若いぼくの目が光る。たばこの最後をふかしたとき、ぼくのことをふたりはだれなんだろうときっと思うのだ。ぼくはふたりのことで頭を悩ます。優しそうな顔をしたこいつは、いくじのない悪魔の眉をしていて、なぜ手に蛍を持って、石の彫像のように突っ立っているのだろうか、なんてね。やさしくいじめてくれたり、映画に連れて行って、涙を流させたりする女がいたり、あるいはロドニー通りの家の台所で飛び跳ねるこどもがいたりするのだろう、なんてね。夏の終わり、夜中に、ガード下で何時間も黙って突っ立っているのは意味がない。フィッシュアンドチップスの店のなか、出入り口、ラビオッティのオールナイト・カフェにはもううずうずして手頃な女の子たちが待っているというのに。あの角のベイ・ビュー・バーの普通席には暖炉の火もあれば、スキットル(訳注:ハウリングのようなゲーム)もある。それに両の目の色が

違った女の子もいるというのに。ビリヤード場も開いているというのに。もちろんハイ・ストリートにはワイシャツにネクタイを締めていないと入れないが。公園はもう閉まり、演奏壇にはカバーが掛けられ、誰もいない。手すりに登るくらいは訳はない。

教会の鐘がどこかでたくさん鳴った。夜の中右手からかすかに聞こえてきた。でもぼくは数えなかった。

もう一人の男は二フィートも離れていなかったが、男の子たちと一緒にあって、叫び声を上げているのだろう。路地のあちこちでほらを吹き、数え歌を歌い、踊りまわり、マネスマンホールで盗みをはたらき、リングコーナーのバケツの周りを小声でしゃべる。どうしてこいつは、ぼくとあのふさぎこんだ男と一緒にこんなところでくさくさしてるんだ。いろいろな音を聞きながら。ぼくたちの吐息、海の音、ガード下に砂をまき散らす風の音、鎖につながれた犬、霧笛、いくつもの通りの向こうを通る電車の音。いろいろなものを見ながら。マッチを擦るところ、陰の中に見える男の子の元気な顔、灯台の明かり、安たばこに伸びる手の動き。敵も味方も至る所、霧雨の中に延びる街、飲み屋、クラブ、喫茶店、徘徊者たちがうろつく通り、舗道近くのガード下に、いっぱいいるというのに。材木置き場の小屋でろうそくをともして、うたた寝することもできるだろうに。

安普請の家並ではいくつもの家族が夕食の食卓についている。ラジオのスイッチが入っている。娘たちの恋人が居間に座っている。近くの家々では、テーブルクロスから記事を拾い読みしている。昼食時のジャガイモがまた揚げられる。丘の家では、居間でトランプをやっている。丘の上の家々は友人たちとパーティだ。居間のブラインドは全部下げられているのではない。ぼくの耳に冷たくも楽しい夜の海の音が聞こえてきた。

ひとりが突然、高くはっきりした声で、言った。「いたい俺たちはここで何をやってんだ。」

「ガード下につっ立ってんだよ。」もうひとりが言った。

「それに寒いな。」ぼくが言った。

「居心地よくはないな。」愛想のいい顔が高い声で言った。もう見えなかったが。「ここよかましなホテルにいたことがあるぜ。」

「マジスティックホテルの夜はどうだった。」もうひとりが言った。

長い沈黙。

「よくここに立っているのか。」愛想のいい男が言った。声変わりしてなかったのかもしれない。

「いや、今日が初めてだ。ときどきプリンミルのガード下にいることはある。」

「古棧橋には行ってみたいかい。」

「雨が降ってたら、収穫なし。」

「桁棧橋の下だぞ、俺が言っているのは。」

「いや、そこには行ったことがない。」

「トムは毎週棧橋の下にいるんだ。」狎顔の男がにがしく言った。「食事を紙に包んで持って行ってやらなくてはならないんだ。」

「ほら、また列車が来た。」ぼくは言った。列車はぼくたちの上をつんざいた。ガードがほえた。車輪がぼくたちの頭の中で金切り声を上げた。耳が遠くなり、眼は光で見えなくなり、火のような重みに押しつぶされた。それからぼくたちはたたきつぶされた黒人のようにガード下の墓場にまた立ち上がった。闇に飲み込まれた街からは何の音も聞こえなかった。電車も音を立てずどころがっていった。押し寄せる波は見えないうちに波止場の汚れをこすり取っていった。ただ三人の男だけが、生きていた。

ひとりが言った。「悲しい生活だな。家がないっていうのは。」

「じゃあ、家がないのかい。」ぼくが言った。

「いや、ちゃんとあるさ。」

「俺もな。」

「ぼくはクームドンキン公園の近くに住んでいるんだ。」ぼくは言った。

「そこはトムが夜な夜な座っているところだよ。フクロウが鳴くのが聞こえると言ってた。」

トムが言った。「ブリッジエンド近くの田舎に住んたやつを知ってるよ。戦時中、弾薬工場があって、それで鳥がみんなだめになってしまったんだ。俺の知ってるやつが言ってたよ。ブリッジエンドのカッコーはすぐわかるって。こんな風に鳴くんだ：カッコーブラッディヨー、カッコーブラッディヨー。」

「カッコーブラッディヨー。」ガードがこだまを返した。

「どうしてガード下に立ってるんだい。」トムが尋ねた。「家の方が暖かいよ。カーテンも閉めて、暖炉のそばに座る。虫みたいにちんまりとね。グレイシーが今夜ラジオに出てる。月明かりの下ではばかもできないさ。」

「家には帰りたくないんだ。暖炉のそばにも座りたくない。家にいても何もすることはない。ベッドで寝たくもない。こんな風に何もすることなく突っ立っているのが好きなんだ。闇の中に、ひとりで。」ぼくは言った。

そうしてぼくは実際にやったわけだ。ぼくは夜ひとりぼっちで歩き回って、街角にいつも決まって立っている。夜の十二時を回って、通りには人影がなくなって、窓の明かりが消えたとき、雨の街を歩くのが好きだった。月明かりの下、誰もいなくなってしんとしたハイストリートの、雨に光る電車をひとりで生き生きと。ぞっとするエベニーザ礼拝堂そばの濡れた道をひどく悲しい思いをかかえて。ぼくは重苦しいそして

遠い存在のこの世界に生きていることをこれほど実感することはなかった。そして自分にばかりでなく、ぼくが苦しんでいるこの地球、ずっと離れた星、火星であるとか金星とか、それからブラゼルとスカリー、中国やセントトマスの男たち、木で鼻をこくるような女ども、お手頃な女たち、兵士、暴漢、警官、眼の鋭い不審な古本買人、ぼろにくるまった性悪女、あいつらは博物館の壁に向かってお茶を要求する、それからファッション雑誌から抜け出したような無垢で近寄りがたいおんなども、背も二メートル以上あって、平坦でてらてらした新作を身にまとい、鋼もガラスもピロードも通り抜けて、ゆっくり進んでゆく、そういう奴らに対しても、愛情と尊大、哀れみと謙遜とでこれほどいっぱいになることはなかった。住宅地にありながら遺棄された家の壁にもたれる、あるいは誰もいない部屋に入り込み、階段の上でぞっとして立ちすくむ、あるいはガラスの割れた窓から海をあるいは見るものもなく外を、あるいは通りの明かりがひとつひとつ消えてゆくのを見たりした。あるいはまだ建築中の家に入り込み、空が屋根に突き刺さったり、猫が階段にいたり、寝室のむきだしの梁に風がふるえるのを見たりした。

「君の番だよ。で、君はなぜ家にいないんだい。」

「いたくないからさ。」トムが言った。

「ぼくはどっちでもいいよ。」もうひとりが答えた。

マッチが燃え上がると、ふたりの顔が揺れ、壁の上に広がり、羽を生やした雄牛と手桶の影が大きくなり、小さくなった。トムが話をはじめた。ぼくはまた別のやつのことを考えていた。そいつは砂地をずっと歩いてガードの前を通り、穴から突然飛び出したようなその高い声を聞いていた。

ぼくは話の最初を聞き逃した。うろたえたように聞き耳を立て、あるいはサッカー選手のように線路の向こう側の灯りめがけて、踊る暗闇の中を、あっちこちと身をかわしている、砂地の男のことを考えていたからだ。それからトムの声を途中から思い出した。

「…ふたりをめぐらせてずうっと登って行って、いい夜だと言ったんだ。ぜんぜんいい夜ではなかったんだけど。砂地にはほかに誰もいなかった。俺たちはふたりに名前を尋ねたね。そうしてそいつらは俺たちの名前を聞いたさ。その頃にはもう一緒に歩いてたんだ。このウォルターはメルバであった、男声合唱団パーティのことをしゃべっていて、ご婦人用のお部屋でなにやってたかしゃべったんだ。いたちみたいにテノールの奴らを引きずり出さなくてはいけなかったよ、なんてね。」

「ふたりの名前はなんていうんだい。」ぼくは尋ねた。

「ドリスとノーマだ。」ウォルターが言った。

トムが言った。「それで砂岡までずっと歩いていった

よ。ウォルターはドリスと、俺はノーマとだ。ノーマは蒸気洗濯屋で働いていた。そうも歩かず二、三分も話さないうちに、おれはこの娘に完全にはまりこんだんだったわかったね。ノーマはかわいい娘ではなかった。」

トムはノーマのことを説明した。ぼくにはその姿がはっきりわかった。ふっくらとした優しい顔、まさに茶色の眼、暖かくて広い口、ふさふさした切り下げ髪、無骨な身体、大根足、でかい尻がトムの話から飛び出してきた。ぼくにはノーマが水玉模様のスモックを着て、堅い手に装身用の手袋をつけ、手首には金の腕輪、それにボイルのハンカチを挟み込んで、文字と取り出し用の金具がついて、それにコンパクト、パスの切符、それから一シリングを入れて、砂地を夕方、秋のにわか雨の降る中、ゆったり歩いている姿が目に見えた。

「ドリスはかわいかったんだ。」トムが言った。「頭がよくて、しゃれていて、ナイフみたいに鋭かった。おれは二十六歳で、まだ恋をしたことがなかった。そうしてタウィ川の砂地の真ん中でノーマをぼかんと見つめていたんだ。自分の指をノーマの手袋に載せることも怖くてできなかった。その頃にはウォルターはドリスの肩を抱いていたよ。」

みんなは砂岡の後ろに身を隠した。夜はすぐにみんなを包んだ。ウォルターは抱きしめたり、いたずらしたりと、ドリスとすごかった。トムはノーマの近くに座っていた。大胆にノーマの手をつかんでいた。冷たい手袋の上からではあったが。そして自分の秘密をみんなしゃべった。自分の歳、自分の仕事。夕方は家で本を読みながら過ごすのが好きなんだ。ノーマはダンスが好きだった。トムもダンスが好きなんだ。ノーマとドリスは姉妹だった。「そんなこと考えもしなかったろうね。君はきれいだから。愛しているよ。」

ガード下のお話はもう砂岡の中の愛する夜に取って代わっていた。ガードは空くらいに高くなっていて。街のかすかなざわめきは消えていた。ぼくはボン引きのように藪の中に隠れ、トムのすぐそばにいた。そうしてトムがノーマの胸に手を回すのを眼を細めて見ていた。「よくもこんなこと。」ウォルターとドリスはふたりの近くで静かに横になっていた。安全ピンが落ちても聞こえただろうよ。

トムが言った。「それから妙なことに、しばらくして、俺たちはみんな砂の上に起き上がり、お互いを見つめてほほえんだんだ。そしてそっと闇の中、砂の上を何も言わずに動き回ったさ。ドリスが俺の横に寝ていた。ノーマはウォルターと寝ていた。」

「なぜ入れ替わったんだい。もしノーマを愛していたんなら。」ぼくは尋ねた。

「なぜかはわからない。毎晩考えてるよ。」トムが言った。

「十月のことだったんだ。」ウォルターが言った。

それからトムが続けた。「七月まではあまり会わなかった。ノーマには顔を見せられなかった。それからふたりは認知命令を持ってきた。判事のルイス氏はもう八十歳で、耳が全く聞こえない。小さな補聴器をつけていた。ノーマとドリスが証言した。それから俺たちが証言した。ルイス氏にはどっちがどっちのなのかわからなかった。それから頭を前後に振って、補聴器を向けて、言った。「犬ころよろしく。」

突然ぼくはひどく寒いことを思い出した。かじかんだ手をこすりあわせた。一晩中、寒い中突っ立って見ろよ。極地のガード下で霜降りの夜、訳のわからない長い物語を聞くなんて考えても見ろよ。「それからどうなったんだい。」ぼくは尋ねた。

ウォルターが答えた。「ぼくはノーマと結婚した。トムはドリスと結婚した。そいつらのおかげで、正しい

ことをしなくてはならなかったというわけだ。それでトムは家には帰らない。朝まで家には帰らないんだ。ぼくはつきあわなくてはならない。兄弟だからな。」

家に帰るには走っても十分はかかる。ぼくはコート
の襟を立て、帽子を深くかぶった。

「それからおもしろいことはだな」トムが言った。
「俺はノーマが好きで、ウォルターはノーマもドリスも好きじゃないんだ。かわいい男の子がふたりいるよ。自分のにはノーマンて名をつけた。」

ぼくたちは握手をした。

「またな。」ウォルターが言った。

「俺はいつもぶらついているよ。」トムが言った。

「じゃあな。」

ぼくはガード下から出て、トラファルガー通りを横切り、険しい坂道を走ってのぼった。